支え合いマップシリーズ

マップづくりの悩み解決法

支え合いマップ専門研修用教材

住民流福祉総合研究所
木原孝久

本書のねらい

本書は、マップ研修を受講し、マップ作りを住民と実践し、出てきた取り組み課題に取り組み始めている現場の人向けの、フォローアップ研修用教材である。

実際にマップづくりを行い、ご近所活動を始めた時に生じる疑問に答えることを念頭に置いている。マップづくりの難しさに当面している人が少なくないが、それは悩みが多様であるということや、マップづくりからご近所福祉活動に取り組むまでの過程の様々なポイントで悩みがあるということによるのではないか。

そこで本書では、マップづくりからご近所福祉までの過程で直面しやすい課題を取り上げ、悩みの解決法を提示することにした。

ポイントを挙げれば、一つは基本に戻るということ、もう一つは悩み克服のために思い切った手を打つこと。後者については、まだ私共でも「試案」の段階だが、今回はそれも敢えて提示することにした。

目次

＜第１章＞世話焼きさんと一緒に
マップづくりもご近所福祉も／４
＜第２章＞某ご近所で社協スタッフと世話焼きさんでマップ作り／１３
＜第３章＞「聴取」の基本に戻る／１８
＜第４章＞関わり合い探しの基本に戻る／２１
＜第５章＞「問題探し」の基本に戻る／２３
＜第６章＞「解決策探し」の基本に戻る／３２
＜第７章＞推進・支援体制の基本に戻る／４１
＜第８章＞ご近所福祉活動の基本に戻る／４２

＜第1章＞

世話焼きさんと一緒に、マップづくりも、ご近所福祉も

⑴「マップを作りやすい」に特化した手法

この章の狙いは、「マップを作りやすい」「マップを作った後にご近所福祉活動がすぐに始まるやり方」―に絞ってある。その基本は…

❶各ご近所の意欲のある世話焼きさんと手を組む
❷世話焼きさんの活動範囲をマップ作りの範囲に
❸その世話焼きさんたちとマップ作り
❹課題が出たら即、世話焼きさんたちで取り組む
❺関係者は世話焼きさんのバックアップ役

❶各ご近所の意欲のある世話焼きさんと手を組む

ご近所の世話焼きさんたち数名とマップ作りをする。その後の活動まで一緒に。世話焼きさんは日常的に問題探しをしているし、問題が見つかればすぐに活動を始めるから、マップ作りの後にすぐに活動に入れる。

❷世話焼きさんの活動範囲をマップ作りの範囲に

機械的に「５０世帯」と区切るのでなく、世話焼きさんの活動範囲でマップ作りをする。それはご近所（５０世帯）の一部かもしれないが、初めから５０世帯全体をめざす必要はない。世話焼きが一人しかいなかったら、その「部分ご近所」から始める。

❸その世話焼きさんたちとマップ作り

その世話焼きさんたちと一緒にマップ作りをする。ご近所の各所から満遍なくとか、班長などの肩書のある人も加えるといった配慮はせず、とにかくご近所福祉に意欲のある世話焼きさんだけに集まってもらう。

❹課題が出たら即、世話焼きさんたちで取り組む

マップで取り組み課題が出てきたら、すぐさまマップ作りに参加した世話焼きさんたちで活動に入ってもらう。そのご近所のすべての課題が出てから、などとは考えず、まず見つかった課題から取り組む。

❺関係者は世話焼きさんのバックアップ役

民生委員や社会福祉協議会、町内会長などは、バックアップ役として参加し、できるだけ世話焼きさん主導で進める。ご近所は私的な営み。ボランタリーな活動で、行政組織（町内会）の下請けではない。

⑵マップ作りの難点は世話焼きさんなら全て解決

マップ作りがうまくいかなかったり、なかなか活動に結びつかないのはなぜか。

❶協力してくれる住民を探すのに苦労する
❷プライバシーの問題がすぐ出てくる
❸問題と解決のヒントが出てこない
❹活動がなかなか始まらない

❶協力してくれる住民を探すのに苦労する

困っている人を探し出し、助けてあげようと思う人は地域にそんなにたくさんはいないし、そういう人でないと、マップ作りに積極的に協力しようとは思わないだろう。その点、世話焼きさんを探し出してマップ作りをすれば、問題はなくなる。

❷プライバシーの問題がすぐ出てくる

困っている人を本気で探し出そうとしている世話焼きさんにとっては、「プライバシー尊重」は障害でしかない。むしろプライバシーを乗り越えて、相手の問題を解決しようとするのが世話焼きさんなのだ。

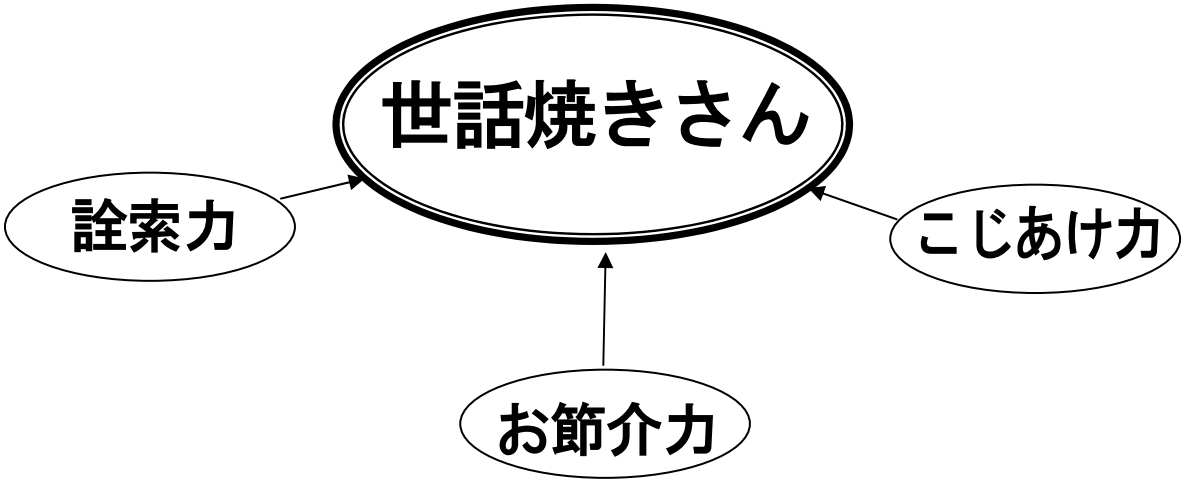
❸問題や解決のヒントが出てこない

世話焼きさんは日常的に、問題を抱えている人を探そうとしているから、マップを作る時点で、既に見つけているはずだ。その問題の解決のヒントも同様。世話焼きさん自身が、既に行動を始めているはずだから、それがヒントになる。

❹活動がなかなか始まらない

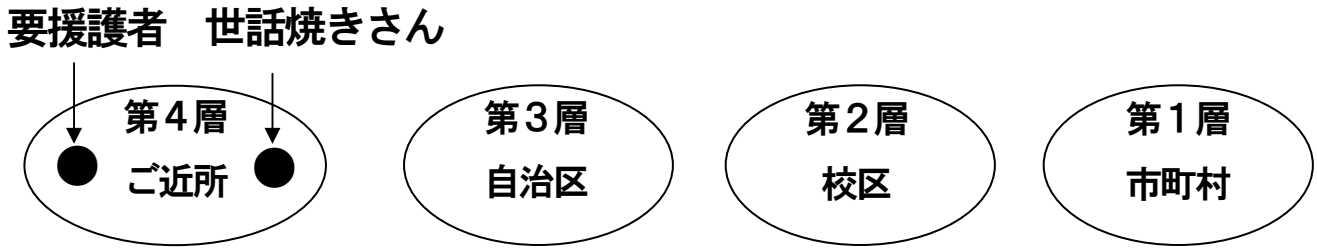
世話焼きさんは、問題を見つけたら、即刻行動に移す。だから、世話焼きさんとマップを作れば、こういう心配は初めからないのだ。

⑶3つの力を兼ねた世話焼きで攻撃的助け合い



⑷ご近所に大小世話焼きさんがいた

地域で要援護者のお世話をしている世話焼きさんは、顔の見えない第３層以上では活動できないので、主にご近所で活躍している。意外や、ご近所は大中小の世話焼きさんが活動する、人材の宝庫なのだ。



⑸あなたの「世話焼き」度は？

以下の項目で該当するものが多い人は、世話焼きさんだといえる。

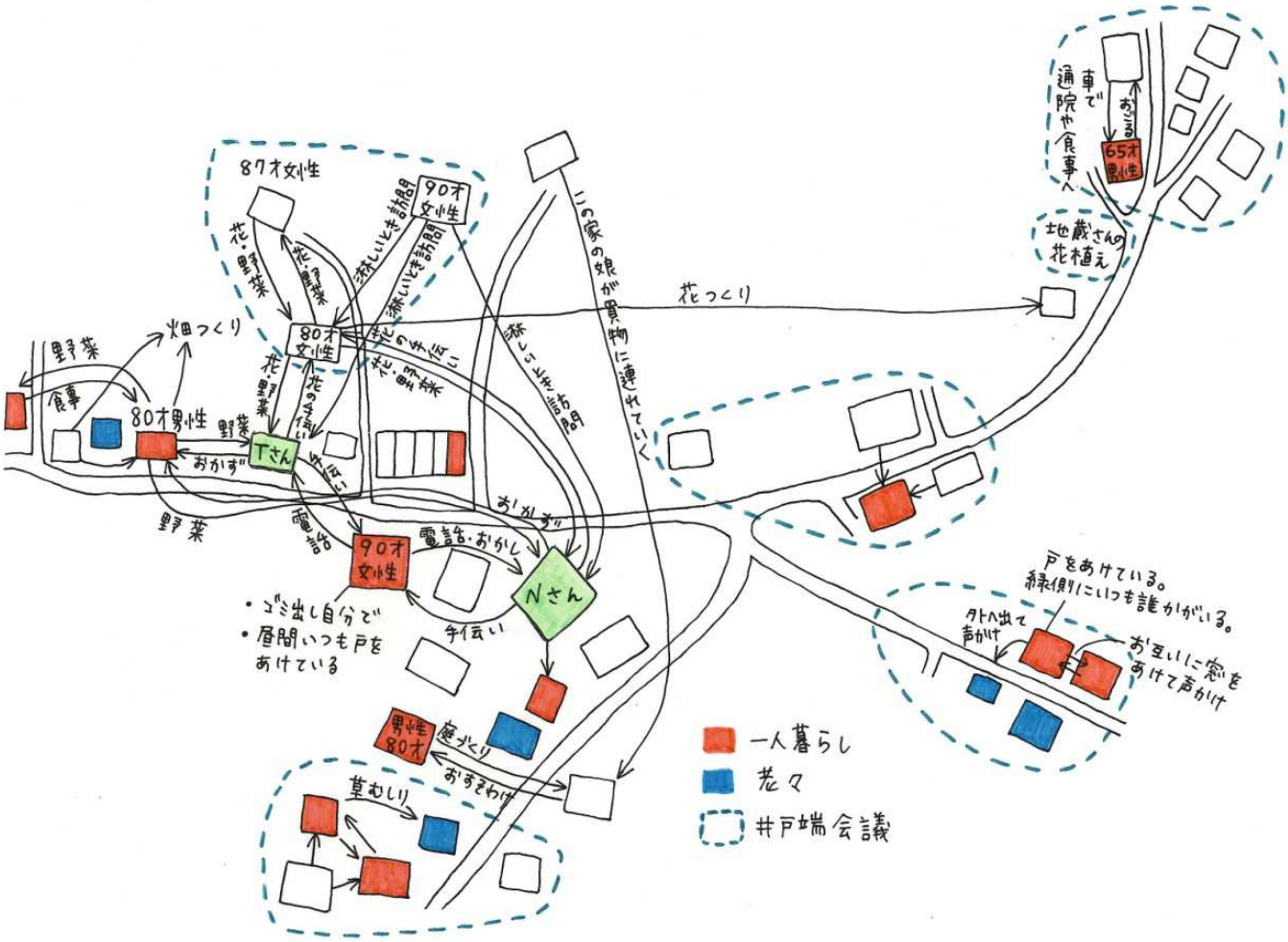
❶いつも「困っている人はいないか」と周りを見ている
❷困っている人がいたら、気になって仕方がない
❸困っている人を見つけたら、即刻その人に関わろうとする
❹相手に頼まれなくても積極的に関わってしまう
❺だれもが私を頼って、助けを求めにくる
❻人間は誰でも好き。私には嫌いな人がいない
❼目立たずに人を助けるのが私の流儀だ
❽役を持たされるのは苦手だ。陰で動いていたい
❾相手の困り事がよく見える
❿私自身、助けられ上手でもある

⑹世話焼きさんをどうやって探すのか？

❶１人見つけたら、その人に聞く
❷世話焼きさんは足元の人を世話している
❸多くはご近所で活躍している
❹超大型世話焼きさんは第１、第２、第３層にいる
❺民生委員は大概知っている
❻日常的にご近所を歩いている人ならわかる
❼世話役と間違えやすいのでご用心
❽マップを作れば確実に見えてくる

⑺世話焼きさんはご近所の助け合いの動向をよく知っている

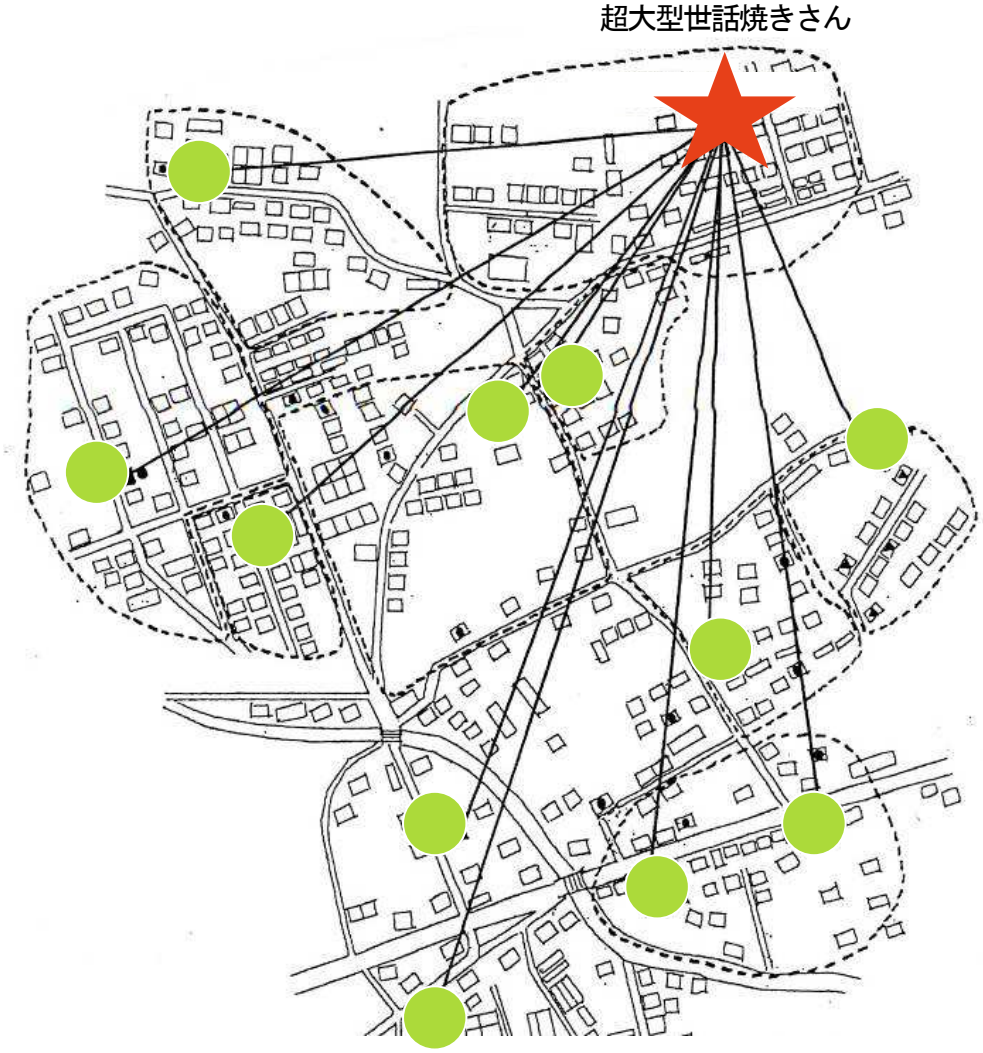
一つのご近所で人々がどのようにふれあい、助け合っているかを調べたら、次のような事実が出てきた。これらはすべて、２人の世話焼きさん（緑色のＴさんとＮさん）から得られた情報である。いかに地域をよく見ているかがわかる。



⑻超大型世話焼きさんは仕掛人

一般に大中小の世話焼きさんは、ご近所内の、自分の足元の要援護者に関わっているが、ネットワークしたり、仕掛け人的な活動はしない。しかし、中には第３層以上の圏域で活躍している超大型世話焼きさんもいる。

次のマップでは、超大型世話焼きさん（★印）が、各ご近所にご近所内のニーズが見える人（●）をアンテナ役として確保し、ニーズを見つけたら連絡するよう指示している。そしてそのニーズに彼女が関われない場合は、ご近所内の世話焼きさんに関わりを指示する。



⑼世話焼きさんに注目した「ご近所」の特定法

５０世帯のご近所といっても、どこからどこまでを区切ったらいいのか。いくつかの「目安」がある。

❶そのご近所の大型世話焼きさんの活動範囲

ご近所内に１人の大型世話焼きさんがいれば、１０人程度の人に関わっているから、その周りの人も含めて、１５～２０世帯の範囲を囲い込んでみると、そこもマップ作りの範囲とすることができる。これを「ご近所」とするのでなく、ご近所の一部と考えてマップ作りをするのだ。

初めからご近所の全体を把握しなければならないということではなく、まず、その中の一部だけでも切り取ってマップ作りをするのでもいい。いずれはご近所の全体が把握できるはずだ。

❷ご近所の世話焼きさんたちがネットを張っている範囲

１人の大型世話焼きさんだけでなく、他の中小の世話焼きもネットを張っていることがわかれば、そのネットの全体をマップ作りの範囲としてもいい。

❸マップ作りに参加した世話焼きさんたちの活動範囲

たまたまマップ作りに参加した世話焼きたちの住んでいる範囲をマップ作りの範囲としてもいいのではないか。そこで出てきた取り組み課題に、まずその世話焼きさんたちで取り組み始めればいい。

⑽取り組み課題探しも世話焼きさんの得意分野

一般住民には、これらは難題だ。気になる人・ことを聞いても、あまり出てこない。解決のヒント探しはもっと難しい。

しかし世話焼きさんは、日常的に気になる人・ことを探しているから、すでに頭の中にある。それに世話焼きさん自身も一部関わっているから、その行為自体が解決のヒントになる。

⑾ご近所福祉の支援役も世話焼きさん

ご近所福祉活動の支援役もまた、世話焼きさんである必要がある。主に超大型世話焼きさんだ。支援者の候補は以下の通りだが、この中の誰が支援役になるかは、この中のどこに世話焼きさんがいるかで決まる。

❶町内福祉委員会がご近所を支援するのが理に叶っているが、世話焼きさんがいなければ機能しない。特にこの場合、町内会の事業としてやってしまう傾向がある。

❷民生委員も同様でご近所活動は民生委員の領分だと思っている人が少なくない。

❸町内が50世帯の場合、町内会長もいるし、民生委員もいるだろう。こうなると、世話焼きさんを中心にご近所福祉という大前提が崩れてしまう。たまたま町内会長や民生委員が世話焼きさんなら問題はないのだが。

❹地区社会福祉協議会がバックアップ役になる場合の問題点は、担当者が日常的にご近所まで足を運んでいない可能性が高く、その場合、ご近所のことをよく知らないまま支援することになるということで、よく検討する必要がある。ただ、地区社協のスタッフに超大型世話焼きさんが混じっている可能性もある。

❺市町村社会福祉協議会が支援役になる場合、数百もあるご近所をどうやって支援するかが大問題である。といって、第３層の民生委員や町内福祉委員会、あるいは地区社協を通して支援するとなると、やはり直接関わるのとはだいぶ異なり、なかなか必要な所に手が届きにくい。社協のスタッフが増強されればいいのだが、それが不可能となれば、例えばマップ作りにだけは参加するといった方法もやむを得ないのではないか。

＜第2章＞

某ご近所で社会福祉協議会スタッフと世話焼きさんでマップ作り

⑴以下は、実際にマップづくりをした結果。両者でまとめた。
⑵問題（気になる人・こと）毎に解決のヒント・解決策を抽出。
⑶①ご近所の問題、②解決のヒント、③解決策の順に羅列。

⑴店まで行くのに坂道で休憩しないと行けない人がいる。

＜解決のヒント＞

①買い物の途中に、世話焼きさんが自宅に招き入れ、休憩させていた。

②雨や雪の日は、車で送ってあげているようだ。

③気心が知れた同士は、遠方まで乗せている人も。

＜解決策＞

①車のない人のために、既に実践している人を中心に、移送してくれる人を確保しよう。

⑵一人暮らし男性で、コンビニ弁当ばかりで健康面が心配な人が。

＜解決のヒント＞

①ご近所に食生活改善推進員のリーダーもいるので、活用したら？

②一人暮らし男性で草刈りをしてくれているので、お礼が必要だ。

＜解決策＞

①彼らへのお礼として、おかずの差し入れをすることから始めよう。

⑶認知症の母を娘２人で介護。窓に目張りをしている。

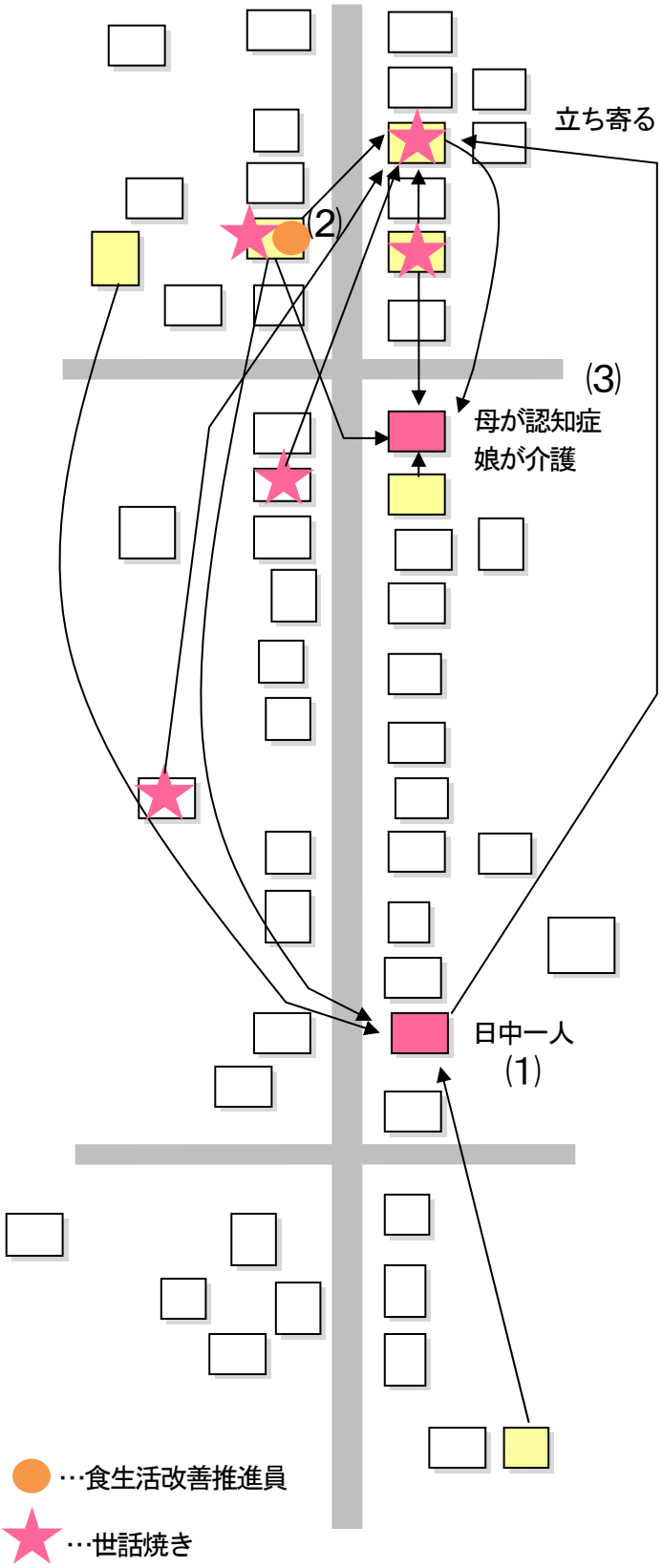
＜解決のヒント＞

①ご近所では、娘と出会った時は声をかけている。

②母は以前、踊りのお師匠さんだった。

＜解決策＞

①教え子たちの指導役をお願いする。



⑷誰でも参加できる集まりがない。

＜解決のヒント＞

①一人暮らしの人が井戸端会議を開いているが、誰でも気軽に集まれる場がない。

②あまり使われていないが、町の集会所があった。

＜解決策＞

集会所でサロンを開催したらどうか。

⑸一人暮らしの男性が行事に参加していない。

＜解決のヒント＞

①以前、この地区では麻雀が盛んだった。

②多人数でできるコミュニケーション麻雀もあるそうだ。

③川柳が得意な人もいる。

＜解決策＞

①麻雀を復活させよう。多人数でできるコミュニケーション麻雀も。

②川柳を集会所に貼ったり、教えてもらったりするのもいい。

⑹ご近所内をウロウロし、出会った人に声掛け、ちょっと迷惑な男性

＜解決のヒント＞

①誰かと話をしたいのかも。

＜解決策＞

①この人も新しく誕生するサロンに入れてあげよう。

⑺寝たきりで一人暮らしの男性

＜解決のヒント＞

①ヘルパー訪問時に戸が開くので、周りで様子を見ている。

②いざという場合は近隣で運び出す相談はしている。

③避難所はすぐ近くにある。

＜解決策＞

①ケアマネ、ヘルパー、施設、民生委員、町内会等で個別ケース会議。災害時に誰

がどうやって避難支援するのかを協議。

②川沿いの一人暮らし高齢者のための緊急時お助け隊を結成。車を持っている人にも協力を求める。

③避難所の「お世話隊」。ご近所在住の元保健師、看護師、介護職を動員。

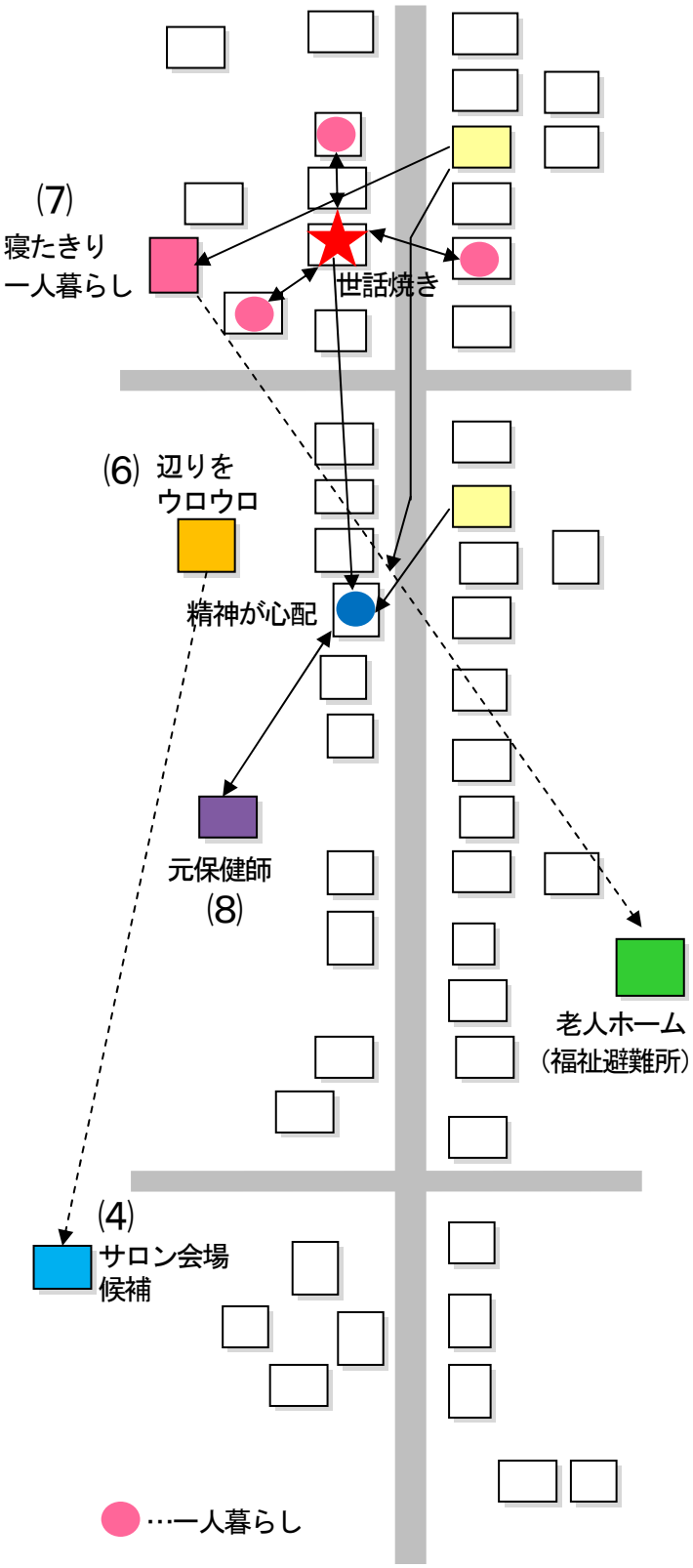
⑻精神障害が心配な一人暮らしの男性

＜解決のヒント＞

①近くの元保健師が相談に乗っていた。

＜解決策＞

①元保健師を中心に精神障害の人たちの見守り体制作り。


(7)
寝たきり
一人暮らし
世話焼き
(6) 辺りを
ウロウロ
精神が心配
元保健師
(8)
老人ホーム
(福祉避難所)
(4)
サロン会場
候補
…一人暮らし

＜第3章＞

「聴取」の基本に戻る

⑴聴取に5つの悪条件

①聴取の時間はわずかに１時間半

–これ以上長いと疲れる。だから一刻も早く相手の懐に飛び込まないと…

②住民と聴取者は初対面

–親しくなるには時間が短すぎる。でも仕方がない

③引き出したいのは、住民が話したがらない情報

–ある程度強引にでも聞き出す努力をする必要がある

④住民は必ずしも真剣に地域のことを考えてはいない

–こちらが真剣になっていることをまず理解してもらわねば

⑤日本人の“助け合い拒否型”おつき合いの伝統

－自分のことは知られたくない、相手のことは知ってはならない

⑵悪条件を乗り越える5つの努力

①住民のフトコロ深く入り込む

ーいかにも長い付き合いのような顔をして、相手にぶつかっていく

②「この人は、このご近所のことを本気で考えている！」

ー真剣な姿勢を態度で見せる

③聴取の主導権を握り続ける

ーこちらの聞きたいことに答えてもらう。無駄な時間を作らない。スピード感をもって。情報を持っている人を早めに把握し、質問を集中させる

④攻撃的聴取

ー住民が語りたがらないことも、かまわず質問

⑤教育的聴取

ー福祉の目指すものを住民に納得させる。福祉教育をする気持ちで。

⑶聴取が成功するための基本条件

①ご近所ごとにマップ作りをする
ー数百世帯の町内を一挙に作るのは厳禁

②ご近所から最低５人は集まってもらう
ーご近所に在住の人に限る

③できればこちらが求める人材を
ーご近所の人間関係をよく知っている人。プライバシーにこだわらない人。
世話焼きさん。オープンな要援護者。福祉問題がよく見える人。

④住民の少数精鋭とケア会議というやり方も
ー多人数が集まると、住民は周りの人を気にして情報を出さない

⑤「プライバシー」問題では毅然とした姿勢で
ー「その人を助けるか、プライバシーを尊重するか」の選択

⑷「聴取」とは一体何だったか？

聴取が難しくなる原因を探っていくと、聴取そのもののやり方が間違っているということに気づく。本来のマップづくりは、それぞれのご近所の人たちが集まって、自分たちのご近所の実態を調べ、課題を明らかにし、皆でそれに取り組んでいくことでなかったか。

そういうことをやらずに、福祉関係者がご近所の住民を集めて、あれこれ聞くということをするために「聴取」という言葉が使われることになった。

原点に戻って、「ご近所さんによるマップづくり」となれば、もはや「聴取」ではなくなるし、難しさも消えていく。

＜第4章＞

関わり合い探しの基本に戻る

①住民の支え合いを第一義と考えること
ー要援護者にはまず住民が関わるべきだと説く

②「あまりない」は「少しはある」ということ
ーそのかすかな関わりを徹底的に追及していこう

③引きこもりの人も、２、３人との関わりはあるはず
ーどんなに引きこもりでも、誰かには門戸を開けているものだ

④身内と思って真剣に考えてもらう
ー相手を他人事と考えていては、大事な情報は引き出せない

⑤線が引けなかったら、再度隣人に聴取
ー住民同士の関わり合いはごく近くの人しか見えない

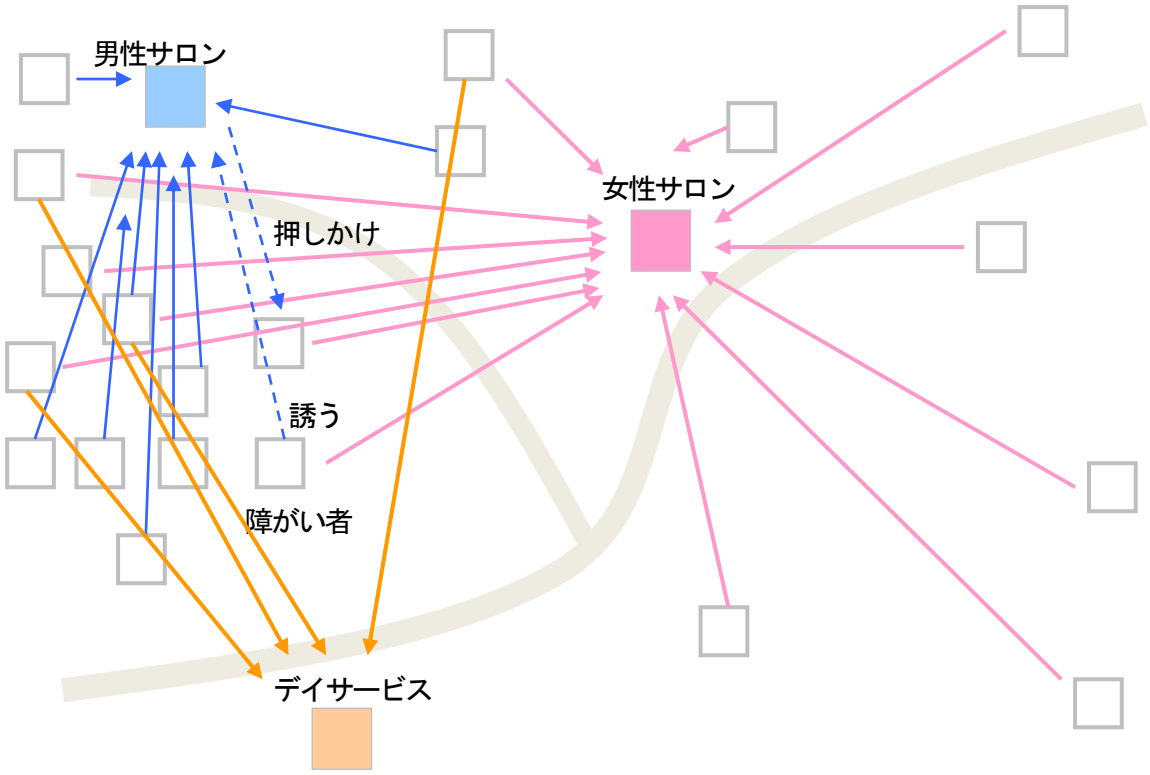
⑥世話焼きさんなら確実に関わり合いをしている
ー事例が出てこなかったら、世話焼きさんに聞け

■どれだけ引けたかー福祉の線

❶この男性向けのサロンに、もっと来ていい男性はいないのかと調べると、２人いた。１人は要介護の男性。主催者の男性も含めて、彼をサロンに誘おうという考えは持っていなかった。この人を誘うことはできまいかと聞いたら、「体力的にちょっと無理かな」という。ならば、その家に「押しかけサロン」を開きにいったら

どうかと言った。ここでサロンから彼の家へ向かって線が一本引ける。これが「福祉の線」だ。

❷もう１人は、身体障害者の男性。彼については、「誘えば来るかもしれない」という話が出た。「いや」ではないということらしい。これが第二の「福祉の線」だ。



❸女性のサロンで意味があると思われるのは、このご近所でデイサービスを利用している人はすべてこの女性サロンに受け入れられていた点だ。

＜第5章＞

「問題探し」の基本に戻る

⑴問題探しの基本的な心構え

①「問題」探しのために、聴取をリードする

ー聴取は始めから終わりまで「問題さがし」に徹底を

②問題を予測して質問をぶつける

ー「地域ではこんな問題があるはずだ」ー引き出しを持っていること

③本人は何が問題だと思っているのか

ー本人の困り事は何か。どうしたいのか、願いは何か

④福祉の理想を始終意識する

ー福祉のめざすものを見失ったら、聴くことがなくなる

⑤ご近所の本質的な問題は？

ー個々の要援護者のことだけでなく、地域としての問題も

■ご近所の本質的な問題。例えば…

⑴新しくご近所に組み込まれた集落。両者に全く行き来がなかった。

⑵ご近所の真ん中に幹線道路。ここで住民は分断されていた。

⑶集落の床下に川が流れている。川が氾濫したら？

⑷雨が降れば床下浸水。みんな慣れっこになっている。

⑸家と家の間が１キロもある僻村。

⑵「気になる人」探しの4つの視点

①安全は守られているか？

－見守りはきちんとなされているか。危機対応は十分か。

日々見守る体制はできているか。何かあった時の連絡体制は？

②困り事はないか？

－本人の困り事を突き止めているか。

本人が意識しない、隠れた困り事もある。

③介護や介助はきちんと行われているか？

－プロの関与は十分か。住民による介護サポートは？

家族の支援までなされているか。

④「その人らしく」生きているか？

－本人がこだわっているものに関わっているか。

豊かさダイヤグラムは満開か？

⑶「気になる人」を読み違えないように

マップは「気になる人」を探すのだが、その人の何が、どう気になるのかを読み違えると、福祉とは反対のことをやってしまうことにもなる。
マップづくりの場で出される「気になる人」を並べてみた。

❶サロンや町内行事に参加しようとしない。
❷町内会への入会を拒否している。
❸迷惑な行為をする人。
❹サービス利用を拒んでいる。
❺ご近所と顔を合わせたがらない。
❻ゴミ出しのルールを守らない。

［解説］

❶サロンや町内行事に参加しないのが、なぜいけないのか。主催者側の立場から相手を見るのではなく、どんなふれあい、社会参加をするかは本人が決めることであり、一律に決められるものではないのだ。
❷町内会の入会を断る理由は「入会しなくても困らないから」。この種の組織に入るかどうかの判断基準になるのは、「困ったとき助けてもらえるか？」。助け合いの活発な町内会なら入会したくなるはずだ。
❸地域には、「あちこちに放尿する男性」など、奇妙な、迷惑な行為をする人がいるが、その行為だけに目を奪われると、読み違えることになる。大事なのは、本人の側から眺めること。その行為に及ぶ理由が必ずあるはずで、それを探り出し、問題解決を図れば、迷惑行為もおさまる。
❹サービス利用を拒む人も困った人と見られがちだが、経済的問題があれば別として、できる限り地域で自立して生きたいという本人の願いが背景にある場合が多く、それをこそ私たちは応援すべきである。
❺ご近所の人と顔を合わせたがらない人は、どのご近所ごとも必ずいるが、それ自体は「福祉問題」とは言えない。福祉に関わる人は、つい「ふれあい」を押しつけ

がちだが、豊かな生活をしていく上での「ふれあい」の優先順位は、個々まちまちなのだ。

❻今のゴミ出しの決まりはかなり複雑で、一人暮らしの高齢者には対応しきれないほどである。それに少しでも認知症が入れば、とても無理。これは福祉問題として対応すべきである。

［読み違えないコツは本人側から見ること］

共通点は、社会通念上、「こういう行為は好ましくない」と断じてしまうことだ。そうした社会通念に従えない所に、要援護者たる所以があるので、そこを理解してもらえなければ、彼らの立つ瀬はない。社会通念に従えないその人特有の「事情」を探り出し、その人の側からその人に合った解決策を考えてあげることを「福祉の視点」と言うのだ。

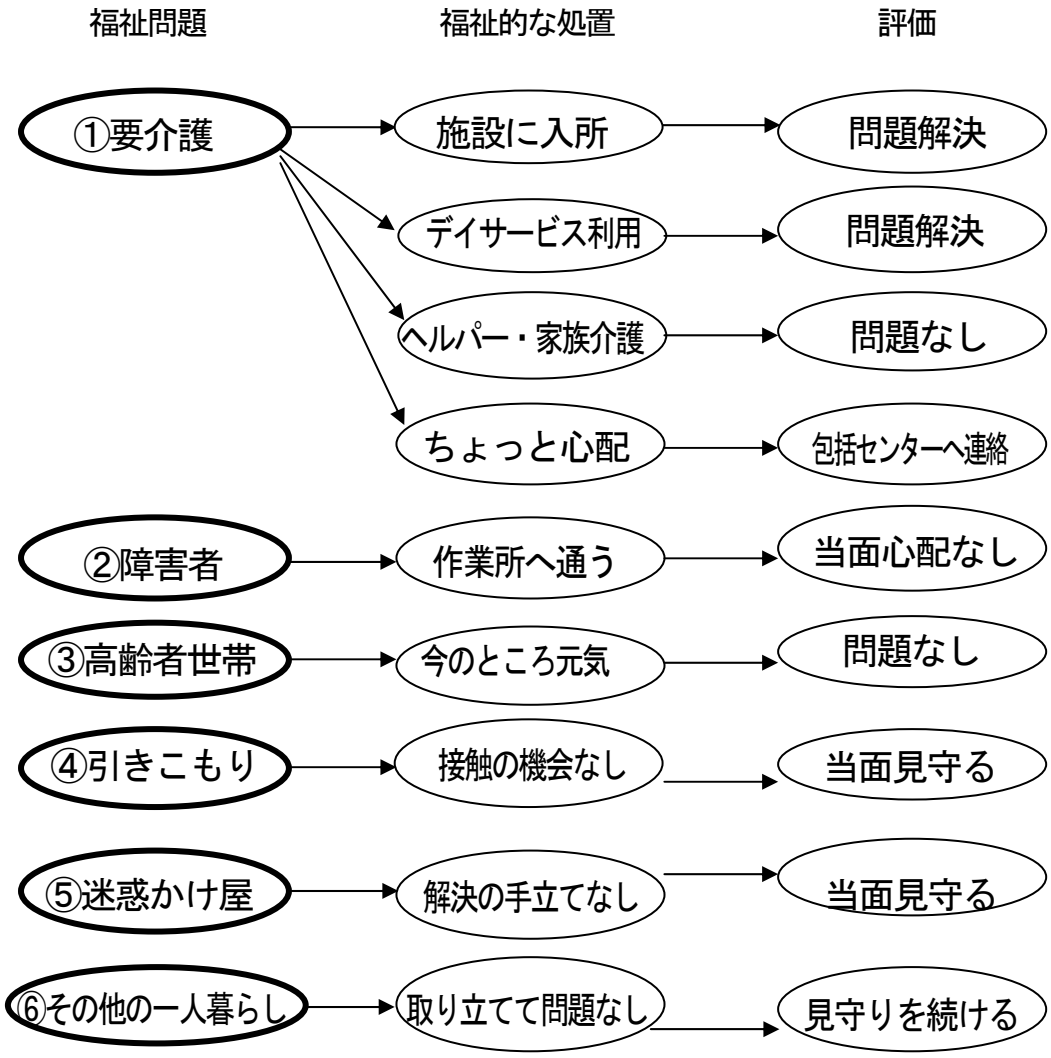
⑷この人、気にならない？

＜自他の意思で、勝手に地域から卒業してしまうケース。それでは福祉にならぬ＞

本人の事情	卒業の対象	卒業させない策
超高齢で耳が遠くなった。「通訳」がいたが、要介護になった	結果として、サロンへの足が遠のいた	新しい「通訳」を掘り起こそう
１０９歳になった	老人クラブから「卒業」した	メンバーが本人宅を訪れて「押しかけクラブ」
膝の手術を控えている	女性サロンから引退。	メンバーが本人宅を訪れて「押しかけサロン」
同上	畑で野菜づくりができなくなった	皆で畑に連れ出そう
デイサービスを利用し始めた	日程が重なり老人クラブに参加できなくなった	ケアマネと日程調整で参加可能にしよう
元大学教授。元自治会長で、デイサービスを利用し始めた	地域活動から完全に引退	他にも文化人が多数いるので、教養講座の講師になってもらおう
９０代の男性。認知症の妻の介護に専念	サロンや老人クラブなど地域活動から引退	要介護の妻同伴の参加も勧めよう
老人ホームに入所	地域から完全に撤退	里帰りで自治会活動の参加を応援しよう。組費をまだ徴収していた
高齢で足腰が立たなくなった	カラオケサークルに行けなくなった	仲間が車で運んであげよう
長年引きこもっている		密かに犬の散歩をしていた。ならば犬を通したふれあいを広げよう

⑸「気になる人」がいない！

以下は、成果が出ない場合にありがちな、マップ作りの結果である。もしこういう結果が出たとすれば、「気になる人」は事実上、その地域にはいないということになってしまう。



［問題点を指摘してみよう］

⑴**施設に入所、デイサービス利用、ヘルパーが入った、**で問題解決と言っていいのか？ 入所した本人は、せめて里帰りをしたいと思っているのではないか。当事者が望んでいることを確認して、応じてあげる努力もしなければ、本当の「問題解決」とは言えないのではないか。

⑵**デイサービス**利用と言っても、週に２日程度だろう。あと５日は地域にいるのだ。しかし今はデイサービスを利用すると、サロンなどに入れてもらえない。そうやって地域と３ヶ月もご無沙汰していると、「完全に地域との関係が切れてしまう」と、デイサービスのスタッフ自身が危惧している。

⑶**ヘルパー**が入ったら、地域はその家に関わらなくなる。それでいいのか？ 宮崎県小林市の社会福祉協議会が、ヘルパーが入った家について、サービスの枠外のニーズを調べてみた。そこで出てきた１つが、網戸の修理だった。そこで中学生やシニアからボランティアを募集して、まとめて対応したという。介護保険に該当しない福祉ニーズが案外眠っているのではないか。

⑷**ちょっと心配な要介護者**。例えば認知症の一人暮らしの女性が地域で自立生活をしていると、ちょっと心配、つまり危険だから施設入所を関係機関に働きかけようということになる。しかし本人が地域で生きていきたいのであれば、これを守ってあげるのが本当の福祉のあり方なのだが、結局、関係機関につなげて終わりとなる。

⑸**障害者**の場合、作業所に通っていれば「大丈夫」と見てしまう。しかし作業所でその人の能力が開発され、自立できる道がひらかれるのか、ということを考えなければならない。

⑹**高齢者世帯**がまだ元気だから何もしなくていいのではなく、夫婦どちらか、または両方が要介護になる前にどんな準備をしておくべきかを考えていく必要がある。

⑺**引きこもりの人**の場合、少し考えただけでは、接触のチャンスは見つからない。糸口になりそうな情報を探したり、皆で本気で頭を絞っているうちに、ようやく見つかるものなのだ。

⑻騒音やゴミ屋敷などの**「迷惑かけ屋さん」**も同様で、解決のヒントを皆で徹底的に探す努力をしなければ、そう簡単に手立ては出てこない。

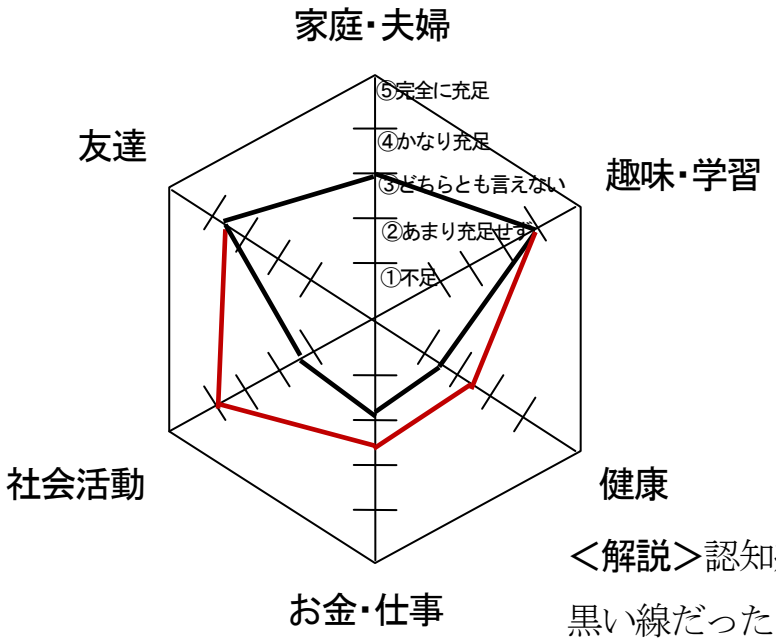
⑼**その他の一人暮らし高齢者**の場合、特別心配という人はあまりいなくて、誰かが見守っていればそれで「大丈夫」となってしまう。しかし今の福祉が目指しているは、安全だけでなく、生きがいある生活ができるようにしてあげることであり、そのために支援すべきことはたくさんある。

⑹ダイヤグラムで「その人らしさ」を測定

＜豊かさダイヤグラムの測り方＞

❶自分らしくの充足度を測る「豊かさダイヤグラム」とは？

項目はここにあるように６つ。①仕事・収入、②健康、③趣味・学習、④家族・夫婦、⑤友達・ふれあい、⑥社会活動。ボランティア。



＜解説＞認知症の女性。黒い線だったのを、赤い線に改善

認知症の８０代の一人暮らしの女性。「趣味」は畑で野菜作り。収穫した野菜でおしんこを作っている。畑で隣り合った仲間（３人）とおしゃべり（「友達」）。妹がすぐ近くに住んでいて毎日様子を見に来る。娘も時々やって来る。

この女性の場合、収穫した野菜で仲間と料理作り。それなら火も使える。作ったおしんこを配れば「社会活動」。おしんこを市場で売ればお金にもなる。活動が活発になれば「健康」も改善。「趣味」も充実。

＜第6章＞

「解決策探し」の基本に戻る

⑴これはまだ「解決」ではない

①状況をよく把握する

－「把握」した上で、どんな解決策を考えるかが大切

②情報を共有する

－共有した上で、どんな解決策を考えるか

③当面、様子を見る

－まだ行動に移しているわけではない

④見守る

－ただ見ているだけでは、解決行動とは言えない

⑤相談に乗る

－相談に乗った上で、どんなアドバイスや支援策を講じるかが大切

⑥サロンに招待する

－サロンという環境に置いてあげただけ。そこからどんな変化が？

⑦関係機関やサービスにつなげる

－繋げれば一件落着とは言えない。当面の応急措置にすぎないかも

⑵解決策さがしの基本的なあり方

①本人はどうしたい、どうしている?

問題に当事者はどうしたいのか、実際にどのような解決行動をとっているのか。などを聞く。

②周りの人はどうしている?

周りの人たちはどうしてあげたいのか、どういう行動をとっているのか

③解決につながりそうな人や行動を探す

当事者の問題への解決努力とは別に、その問題解決につながりそうな地域の資源を探してみるのもいい。

④解決策さがしはマップ作りの場で行う

解決のヒントはマップ作りの場に転がっている。そこでヒントを見つけ、それを生かした解決策を住民に提案し、反応を見ながら、現実的な解決策を模索する。

⑤解決策の引き出しをたくさん用意しておく

問題ごとにいくつかの解決策の案を用意しておいて、それをぶつけていけば、どれかは当たるも可能性が高い。

⑶担い手・推進者主導の解決策は改めよう

❶ 毎日コンビニ弁当や外食頼りの男性がいるので、会食会を立ち上げたらどうか。
❷ 自治会に加入していない人がいるので、自治会長等が訪問して入会を勧める。
❸ この地区に福祉委員がいることを知らない人がいるので、周知を徹底する。
❹ 老々世帯で心配な家もあるので、民生委員に訪問してもらう。
❺ ふれあいが欠けているようなので、自治会でサロンを立ち上げたらどうか。
❻ 若者世帯がいるのに高齢者と交流がない。〇〇会館で交流イベントを開こう。
❼ 一人暮らし高齢者が多いので、班長や福祉協力員などで見守り隊を編成する。
❽ 一人暮らし等で老人クラブに加入していない人もいるので、加入促進を図る。
❾ 認知症で一人暮らしの女性が気になる。民生委員がデイサービスを勧める。
❿ 区長を中心に班長、福祉委員、民生委員などで小地域福祉の推進体制を作る。

⑷取り組み課題を圏域毎に「振り分け」「一般化」

振り分け

⑴ご近所で解決できない部分を各層が持ち味を生かして分担
⑵ただし、４つの条件あり。＜注＞第２章の事例を参照

❶ご近所解決（課題を上層に持って行かず、ご近所で解決）

食事系のサービスと言えば、上層（第三・第二）で大人数を集めての食事サービスを考えるが、この事例だと、ご近所在住の一人暮らし男性に対して、ご近所に在住の食生活改善推進員を中心としたサービスを組み立てている。ご近所で解決するために、ご近所らしい解決法が考えられている。ここでは、おかずの差し入れだ。

❷ご近所結集（関係者はご近所の問題解決でご近所に結集）

災害時の避難支援について、ケアマネ、ヘルパー、施設、民生委員、町内会等で個別ケース会議を開こうということだが、避難支援の主力はご近所さんなのだから、関係者がご近所に結集する必要がある。

❸ご近所調達（できる限りご近所から資源を発掘し、活用）

８つの取り組み課題のほとんどすべてがこのご近所調達の手法を使っている。移送グループも地元ですでに実践している人を主力として組織する。サロンもご近所内に合った集会場を使う。避難所のお世話焼き隊もご近所在住の元保健師、看護師、介護職に参加してもらう。精神障害の相談見守りもご近所在住の元保健師を活用する。

❹ご近所連携（上層が受け持つもご近所さんと一緒に解決）

この事例の中には、上層で受け持つものはなく、しいて言えば避難支援のケース会議は上層の仕事になるかもしれないが、これも避難支援の主力はご近所さんになるのだから、ご近所さんと一緒に取り組むことになる。

一般化

⑶どのご近所にも適用し得るテーマを「一般化」
⑷マニュアル化し、他のご近所での課題解決探しに生かす。
⑸ただし、具体的な取り組み方は各ご近所らしいやり方で。
⑹一般化の対象事業になったものと、それをマニュアル化したものを、他のご近所でのマップづくりに生かす（参考にする）。

■第２章のマップづくりで出てきた取り組み課題の中から、一般化できそうなものを抽出してみたら…

以下のように、８つの取り組み課題のすべてが「一般化」できることがわかった。

①買い物に行くのに車がなくて不便（⑴のケースを一般化）。
②一人暮らし男性でコンビニ弁当ばかり。
③認知症の親を子どもが隠している。
④精神障害が心配な人の相談支援問題。
⑤誰でも参加できる集まりがない。
⑥一人暮らし男性が行事に参加していない。
⑦地域の「ちょっと迷惑な男性」。
⑧寝たきりで一人暮らしの人（特に男性）。

⑸「取り組み課題」抽出のヒント探し事例

（第２章のマップ・本人や周りの解決努力や解決のヒントを探した例）

①食事の問題。

一人暮らし高齢者たちが草刈りをしてくれているので、お礼におかずの差し入れ。

②ご近所を歩き回って、出会った人に声掛けする「迷惑な男性」の問題。

これから作るサロンの仲間に入れてあげる。

③認知症の母親を介護中の２人の娘。窓に目張り。

「本人（母親）が以前、踊りの先生をしていて、教え子たちがご近所にたくさんいる」という事実を生かして、踊りの指導をしてもらう。

④一人暮らしの男性が行事に参加しないという問題。

昔このご近所でマージャンが流行っていた、しかも何人でも参加できるコミュニケーションマージャンがあったというので、これを復活させよう。

⑤精神障害が心配な一人暮らしの男性。

元保健師が彼の相談に乗っていたというので、その人を中心に精神障害の人たちの見守り体制を作る。

⑥寝たきりの一人暮らしの男性。

見守りは既に実行しているものの、災害時にはどうするかが問題になった。近くの福祉避難所があるので、一人暮らしの人たちの緊急時お世話隊を作って、ご近所に在住の元保健師や看護師、介護士に協力してもらう。

⑦店まで行くのに、坂道で休憩しないといけない人の問題。

既に休憩所になってくれている家や、場合によっては送迎してくれる人がいるので、その人たちを中心に、移送してくれる人を確保する。

⑹「振り分け」の具体例（第２章の事例参照）

＜ご近所でできない部分を、それを担うのがふさわしい圏域で分担＞

❶移送してくれる人を確保する場合、事故対策や車両の調達、謝礼をどうするか、ローテーションのあり方など。
❷おかずの差し入れでは、人材の確保策、食品衛生法の問題。
❸認知症の問題では、認知症に関する知識の習得が課題に。ご近所で認知症サポーター研修を行うなど。
❹サロン開催のノウハウの伝達。集会場の整備（バリアフリー等）。メニューの開発。介助や移送。
❺麻雀の設備の調達。コミュニケーション麻雀の知識の習得。場所の確保等。
❻「ちょっと迷惑な男性」への関わり方のノウハウが欲しい。サロンでどのように受け入れるのか。
❼避難支援のためのケア会議のご近所段階での開き方。避難所での世話焼き隊の作り方。緊急時のお助け隊、避難所でのお世話隊などの編成方法や活動法。
❽精神障害者との接し方、精神障害に関する知識、見守りのあり方。

役割分担と並行して、同じニーズが他のご近所でも出てくるから、これらを請け負った圏域が、それぞれノウハウを取りまとめ、蓄積していく。三つの圏域が、ご近所のための「後方倉庫」と考える。５００もあるご近所の多くから、同じような要請が来るから、その時に必要な情報、ノウハウ、人材を引き出し、派遣すればいい。

⑺要援護者はどんな協力ができるのか？

＜福祉は受け手と担い手の協働作業。では受け手はどんな協力を？＞

＜注＞下の⑴⑵⑶…の番号は、第２章の取り組み課題事例の番号。

❶自分のため（または仲間と一緒に活用）の担い手を発掘する。

⑴当事者が各自、自分を移送してくれる人を開拓。その人材を仲間にも「おすそわけ」。

❷担い手が活動し易いように工夫する。

⑻精神障害者が仲間とつながり、共同で支援を受ける。

❸担い手に支援の仕方を提案する。「こうしてくれると助かる」。

⑸マージャンや川柳をどのように提示すれば参加しやすいかを提案する。

❹担い手の支援活動に参加する。両者合同の活動。

⑺避難訓練に被支援者（当事者）として参加。避難支援の仕方・受け方を一緒に考える。

❺担い手に支援のお返しをする。文字通りの「助け合い」に。

⑵手作りの料理をボランティアにふるまうなど。

❻当事者同士で助けたり助けられたり。

⑵一人暮らし男性同士で、食事の問題解決の情報交換やおすそ分けし合い。

❼当事者側の考えや願いを発信する。

⑹「ウロウロしてみんなに話しかける男性」自身が、自分が本当に求めていることをきちんと訴える。

❽活動のあり方を担い手と一緒に学習する（合同研修）。

⑺避難支援や避難所での支援のあり方で、担い手と受け手が一緒に学習する。

❾当事者として活動組織のメンバーに加わる（両者一体の組織）。

⑷ふれあいサロン作りで、一人暮らし高齢者たちとボランティアが一体で推進する。

今のところ、現実にはこういう発想自体が、担い手にも受け手にもないので、これらの案がどこまで実現可能なのかはわからないが、もしこれらが実現した時に、福祉活動はどれだけやり易くなるか、また当事者にとっていかに満足のできる関係が担い手との間にできるかを考えると、やはり思い切ってこういう発想を広げていく必要がある。

＜第7章＞

推進・支援体制の基本に戻る

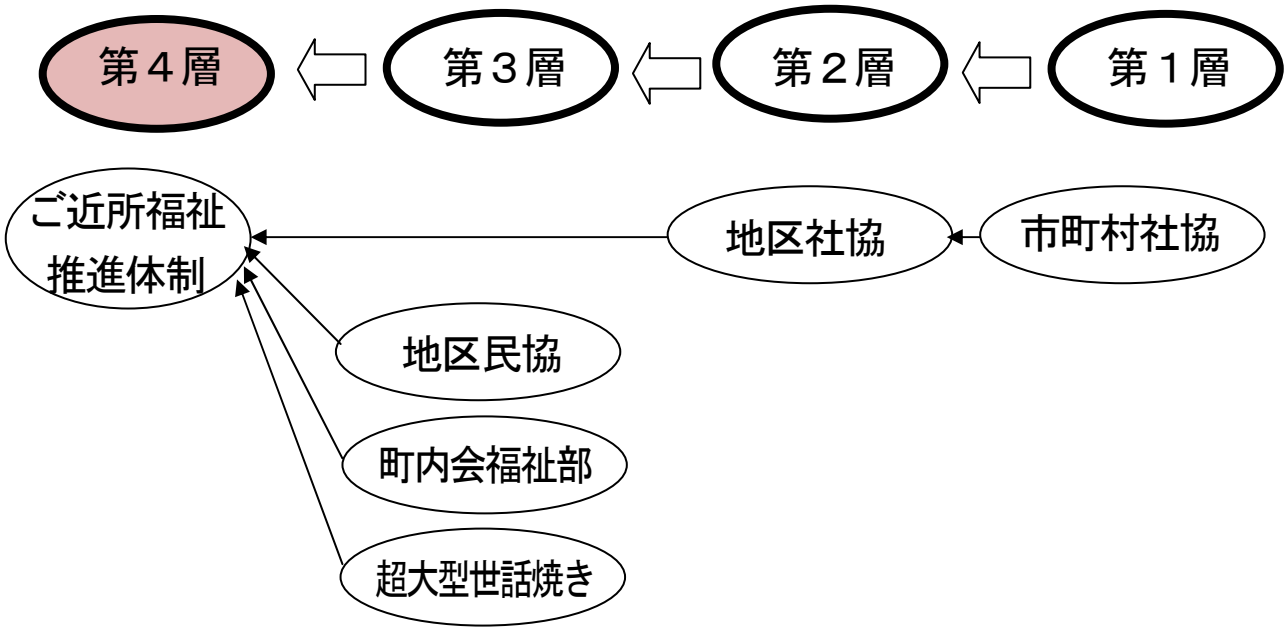
⑴ご近所福祉推進グループの編成のあり方

⑴マップづくりに参加した世話焼きさんを中心に

⑵マップづくりで新たに発掘した世話焼きさんや当事者も参加

⑶ご近所福祉活動に取り組む意欲のある人で構成

⑵ご近所福祉「支援」体制



⑴直接の支援者はご近所に近い第３層から選出。

⑵ご近所毎に適役を探す。特定支援者に統一しない。

⑶ご近所チームはボランティアで行政の末端組織ではない。

⑷ご近所に対し、上から指示や命令をしない。

⑸第３層は後方支援役。ご近所福祉を実行するものではない。

⑹推進協議会を作るのなら、各ご近所に、ご近所さん主体で。

⑺各層の支援体制は、ご近所支援の中で自然に生まれてくる。

＜第8章＞

ご近所福祉活動の基本に戻る

⑴マップを作るということは…

ただマップ作りをするのではなく、支え合いマップを作る目的を理解してマップを作っているのかが問われる。

❶目的はマップづくりではなく、ご近所福祉活動を進めること。

①マップづくりは元々手段。マップづくりが目的になっていると、マップを作った時点で事業は終了してしまう。その「事業」には成果というものがないので、結局、マップづくりから離れていってしまう。
だからマップづくりをしたら、必ず、そこから出てきた取り組み課題を実行する、つまりご近所福祉活動につながらなければならないのだ。そこまで考えずに、ただ漠然とマップづくりを始めても意味がない。

②ご近所福祉を柱とした地域福祉推進の理念と体制づくりをしなければならない。

③組織全体でこのことを確認する。一部の部署だけの了解事項だと、いずれ行き詰まる。

④地域福祉の推進法が従来のトップダウン方式からボトムアップに変わるということでもある。

⑤ご近所福祉の意義や推進法に関してスタッフや各界向けの研修が必要になる。

❷ご近所さんを主役に据えること。

①マップづくりの主役はご近所さん、出てきた課題に取り組む主役もご近所さん、そしてご近所福祉実践の主役もご近所さん。

②住民に地域福祉推進の主役の意識を持ってもらうための啓発・教育が必要になる。

❸支援役は第３層で活躍する民生委員や世話焼きさん。

①マップづくりでもご近所福祉推進でも、直接ご近所を支援するのは第３層にいる民生委員や町内会にいる超大型世話焼きさん、町内会の福祉委員会など。

②上記のご近所支援役（ミッドフィルダー・司令塔）を掘り起こし、養成するのが大事業になる。

❹社協は民生委員等に同道してノウハウを提供。

①モデル実験の段階はいいとしても、何百というご近所でご近所福祉に取り組んでもらう段階になれば、社協が直接関わるのではなく、役割分担をしなければ不可能になる。

②民生委員等がご近所に関わる場合に、社協が同道・同席して社協のノウハウを生かすことが期待される。第３層が仲介し、社協が地域福祉のノウハウを生かしてご近所支援という構図も。

⑵活動開始までのプロセス

⑴ご近所推進チームと支援者でご近所福祉推進会議（ご近所で）。

⑵取り組みのヒントを見つけるために再度マップづくりも。

⑶取り組み課題別に、必要な資源をリストアップ。

⑷（ご近所では得られない）必要な資源を各層に振り分け。

⑸その上で、取り組みの優先順位を決める。

⑹ご近所内での役割分担、支援者の役割分担を決める。

⑺活動を開始。

⑶数百もあるご近所をどうやって支援するのか？

❶活動が始まれば、活動の機運がご近所に育ち、同志も増える。

❷大型の世話焼きさんなら、それほど強力な支援は必要ない。

❸一般化できるテーマは、隣接したご近所間で連携する。

❹強大な支援力のある世話焼きさんなら、複数ご近所に関われる。

❺一つのご近所だけでは余力のある大型世話焼きさんは、３層レベルで支援者になってもらう。

❻ご近所に関わっているヘルパー、ケアマネ、包括センター、ＮＰＯ、ボランティアなどを総動員する。

❼人材を発掘するとともに、ご近所サポーターを本格的に養成。

❽社協にご近所福祉推進部門を設置、⑴～⑼を総合的に進める。

❾ご近所福祉を自分たちで実行できる、自立した推進グループに育てる。

❿コーディネーターの資質のある民生委員にも複数のご近所を担当してもらう。

⓫５０世帯の町内会があれば、人材がそろっているから、（特に支援が必要な時以外は）自分たちで推進してもらう。

⓬社会福祉協議会がモデル的に関わるご近所があってもいい（５～１０ご近所程度）。

⓭ご近所によっては、保健師や精神保健ワーカー等に活躍してもらう場合もある。そのご近所は彼らに任せる。

⓮ＮＰＯやボランティアが入っているご近所では、それらの人材にご近所支援役を担ってもらう。要援護者への個別対応でなく、ご近所福祉推進という視点で関わるよう依頼する。

⓯「部分マップ」（ご近所の一部だけマップを作る）の場合は、他のご近所支援者に掛け持ちしてもらう。

⓰民生委員の地区組織が、グループでご近所福祉支援をすることができる。ＮＰＯもグループでの支援が可能だ。

⓱ご近所支援の専門研修を開催し、ご近所支援の候補を掘り起こす。

⑷果たして「ご近所福祉」活動は可能なのか？

地域崩壊とも言われる時代に、ご近所という小さな圏域で、主体的な福祉が始められるものなのか。

❶マップを作れば、何処でも多かれ少なかれ助け合いが行われていることがわかる。ご近所ごとに数名の世話焼きさんがいて、ご近所助け合いを仕切っている。それに「乗れ」ばいい。活動を「作る」ことばかり考えない。
❷小さなことから始めよう。やさしいことから始めよう。
❸取り組み課題が出てきて、その一つに取り組み始めただけでも、変わってくる。
❹全国には、町内会が５０世帯の地区がある。ここから始めてもいい。
❺助け合いは、世話焼きさんが中心となってやっている。その世話焼きさんと組めばいい。
❻１人の世話焼きさんの活動範囲だけで始めてもいい（部分的なご近所）。
❼今から本格的に「ご近所起こし」を。同じご近所の仲間という連帯感が持てる仕掛けも。そういう努力を始めたら、すぐにご近所の空気は変わってくる。
❽わずか５０世帯。「顔が見える」圏域でもある。そこで助け合いが始まらないはずはない。
❾世話焼きさんと一緒にマップづくり。彼らがそのまま活動グループになる。
❿マップを作れば、もう活動は始まっている。それを世話焼きさんに会って突き止めよう。小さな活動をおろそかにしない。ご近所活動はみんな小さいのだ。